

事務局は組合員を盛り立てる要と自負して

職員たるもの組合士たれ

中部重機協同組合事務局長の宮田祥子さんは、職員5名中組合士資格を保有者が4名、今年受験者が1名で「100%

が組合士をめざす」という組合事務局の一員である。様々な組合にお邪魔してきましたが、事務局職員全員の資格保有をめざし、実践している組合は初めてである。

「事務局はこの小所帯で中部重機協同組合の他に、静岡県重機建設業工業組合、職業訓練法人静岡県建設業能力開発協会、静岡県建設学院という複数団体の運営管理に当たっています。そうすると、職員の一人ひとりが組合のことを解っていないと仕事になりません。そこで、トータルに組合のことが勉強できる組合士の資格取得は、半ば当然になっています。このような職場の風土づくりは、組合設立と同時に自ら組合士資格を取得し、その有用性を知り尽くしている山川専務理事のリーダーシップで進められてきました」。

宮田さん自身は、昭和58年に同組合に入職、その8年後には事務局長に就任している。そして「事務局長であるからには

は組合専門知識を深めるように」と山川専務に薦められ受験、平成3年に資格を取得しているが、ちょうど組合入職10年の節目の年でもあったという。

「組合士あるべし」の輪を広げる

「組合の仕事が中心であることは言うまでもありません。けれども、組合士になり、たとえば静岡県中小企業団体中央会など組合の外の世界と繋がり、外をよく知るようにになりました」と、宮田さんは組合士のメリットを感じている。特に、女性職員の場合、全般的に組合の外の世界と触れ合う機会は多くはない。そこで、県内の各種組合の事務局職員で構成されている職員協会には積極的に参加し、ここでは自分の経験や実感も交えながら、女性職員たちに組合士という資格があることを伝え、取得に挑戦してみてはどうかと勧誘を進めているという。

もちろん、この場合は貴重な異業種交流の場の一つでもあるので、種々の情報収集にも積極的に取り組んでいるそうだ。

もう一つ、静岡県の組合士会も情報収集、勉強の重要な場として位置づけているという。「特に、研修会には工夫が凝

らされています。たとえば、今年の女性部研修会では「桜海老漁と業界の現状について」と題して、体験もしつつ、業界の勉強をさせてもらいました。また、全体研修会では「耐震偽装のその後」として私も建設業界から講師をご紹介しましたが、皆さんに好評でした」とのことである。

三位一体の組合運営

宮田さんが事務局長を務める中部重機協同組合は、静岡県中部建設機械事業協同組合として昭和54年に発足、その後、昭和58年に名称を変更、現在に至っている（組合員は3社）。先述のとおり、事務局はこの他に県内業者30社が集まる静岡県重機建設業工業組合、同じく80社が所属する職業訓練法人静岡県建設業能力開発協会とその教習機関である静岡県建設学院の運営も束ねている。それは、これら三者が密接不可分に役割を分担しながら、県内中小建設業者の事業支援、人材育成支援に当たっているからである。

中部重機協同組合の場合、官公需適格組合（昭和61年取得）として公共事業の入札に臨むほか、ブルドーザーやローラ



ーなど10台の建設重機を組合で保有し、組合員に貸し出す事業も行っている。また、建設業に従事するには何種類もの資格が必要であるが、そのような資格取得のための講習研修を実施する建設学院へも重機の貸付の他、組合施設の一部を教室として貸し出すなど側面から事業を支援しているのである。

組合・組合士の今後に意欲を燃やす

建設業は不況産業ではあるが、「ラインラインに関わる産業なのでなくなることはないし、後世に残る仕事でもあるので誇りを感じている」と宮田さんは言う。「だから、今後も組合として県内建設業界の後継人材育成の支援を続けていきたい」

これが事務局長としての宮田さんの抱負である。

組合士としては「昨年からは組合士会の役員になったので、これまで以上に深く関わることになりました。それだけに、組合士になって良かったと思われる会にしていきたい。特に女性組合士を増やしたい」と意欲を燃やしているのである。